

令和元年8月30日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01944

研究課題名（和文）観光における「まちづくり」の意味と知識循環型クラスターについての研究

研究課題名（英文）Community-based tourism development and knowledge management

研究代表者

大澤 健（Osawa, Takeshi）

和歌山大学・経済学部・教授

研究者番号：40261482

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：観光振興のために「まちづくり」が効果をもつ理由について、観光まちづくりの先進地である由布院を事例として考察を行った。由布院のまちづくりは、地域特性をつくる、ひとのつながりをつくる、市場競争力をつくるという3層のフェーズからなっていることを明らかにするとともに、それらを組み合わせた観光まちづくりの「由布院モデル」を抽出して提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

観光振興の現場では「まちづくり」の重要性が強調されているが、まちづくりがなぜ観光地の競争力につながるのかは不明だった。そのため、地域独自の資源を観光に使いば観光振興になると認識されているため、資源消費型で効果のない観光振興が各地で行われている。本研究は「まちづくり」の意味を上述のとおりとして解明することで、地域特性がブランド化戦略の核となり、ひとのつながりがイノベーションの源泉になることで、市場競争力が生み出されることを明らかにした。これによって、「まちづくり」による観光振興の具体的な方法を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）： This work attempts to make the reason clear why community development is needed for tourism development in the case study of Yufuin Onsen. The community development in Yufuin consists three phases as follows 1.develop unique feature of a community 2.develop human-relationship for innovation 3.develop competitive power in tourism market. This work propose "Yufuin- model" combining these 3 phases.

研究分野：観光まちづくり

キーワード：観光まちづくり 地域資源の活用 組織的知識経営 ブランド イノベーション 観光の市場競争力
着地型観光 DMO

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、日本の観光振興の現場では「まちづくり」の重要性が唱えられるようになった。これは、同時期にバブルの崩壊によって多くの観光地が苦境に陥る中で、由布院、黒川、小布施、長浜など「まちづくり」をかかげたまちが人気の観光地になっていったからである。由布院は、こうした「観光まちづくり」の成功例として常に筆頭にあげられ、その「まちづくり」は多くの研究対象となってきた。

観光まちづくりとは、一般的に地域固有の魅力を活かした観光振興だと考えられている。そのため、各地でその地域固有の魅力(地域資源)を再発見し、それを観光資源として活用する取り組みが進められている。

しかし、この種の観光振興手法が成功したところはきわめて少ない。もともと観光用ではない地域資源を観光に用いようとしても、地域住民の協力を得ることに多くの労苦が必要とされる上に、多くの集客や収益を得ることに限界があるからである。

90年代には観光まちづくりの多くの成功事例が現れたにもかかわらず、それを模倣・導入しようとするとうまくいかないのはなぜなのか。こうした視点から、観光まちづくりの意味と実践方法を改めて考察する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、観光まちづくりとは何か、またそれがなぜ観光の振興につながるのか、という点を観光まちづくりの先駆的事例と言われる由布院温泉を事例として検証することを目的とした。その際に特に重視したのは、由布院温泉が観光地としての持続的な市場競争力を獲得していることであり、こうした市場における強さの源泉を「まちづくり」の意味から解明することであった。

3. 研究の方法

研究方法として、文献・資料調査、ヒアリング調査、データ分析という手法を用いた。

については、由布院温泉はまちづくりの経過を詳細に記録している点に大きなアドバンテージがあった。初期のようすは「町造りの雑誌 花水樹」として詳細に記録され、その後も数々の著述やパンフレット、さらには地域の人たちが残したメモなど多くの資料に恵まれている。こうした文献や資料を丁寧に読み込むことによって、まちづくりの歩みを追究した。

については、文献に残されていないまちづくりの在り方や、文献に表現できない暗黙知レベルの人々の思いや考え方をまちづくりのキーパーソンへのヒアリングによって抽出した。特に、事例として取り上げた宿泊施設の在り方や開業経過、食と農業、アートと景観形成といった分野は資料として残されているものが少なく、関係者から直接話を聞くことによって何をしてきたのかとともに、どのような思いでまちづくりが進められたかを解明することができた。また、まちづくりのリーダーたちに繰り返しヒアリングを行うことで、研究の中間段階のアイディアについて貴重な助言を得ることができた。

については、湯布院町が保有する基礎データとともに、観光協会、旅館組合が保有するデータの分析と解明を行った。1970年代からの経年変化を明らかにするために、協会や組合の年次総会の資料を積極的に活用した。また、これまで行われた各種調査によって得られたデータも可能な限りで收拾し、再利用した。さらに、宿泊施設については開業経過やあり方について直接アンケート調査を行い、既存のデータと合わせて活用した。

由布院のまちづくりはリーダーや関係者が健在なので、資料やデータの活用にあたっては、随時関係者に提示しながら、確認と裏どりを行った。

4. 研究成果

本研究は、観光振興における「まちづくり」の意味を次の3つの「つくる」から解明した。

「由布院らしさ」= 地域特性をつくる。

「動的ネットワーク」= ひとのつながりをつくる。

「市場競争力」= 観光地としての成功をつくる。

これらは、それぞれ観光振興の目的、手段と方法、具体的な実践の内容、を表している。由布院のまちづくりについては、のみが主要な関心事となり、研究の蓄積が見られるが、主要なポイントは と にあり、これらを組み込むことによって観光地としての持続的な競争力を獲得することができている。

は、由布院の観光まちづくりの「理念」ともいえるもので、その最深部にある独自の特徴である。観光振興の現場では、「何のために観光なのか?」という問の立て方が行われることはまずない。観光振興が観光振興のために行われるのが当然だと考えられるからである。しかし、由布院では観光を「住みよい、美しい町」をつくるための手段として使うという発想でまちづくりが進められた。観光の振興はそれ自体が目的なのではなく、地域特有のライフスタイルを守り、つくるための手段として観光が積極的な役割を果たしている。

観光によって地域特性をつくることは、その特性によって観光を振興するという戦略と表裏一体の関係になっている。地域特性をつくることで、他の観光地と明確な差別化を行い、それによってブランド化を行うことが由布院温泉の競争力のひとつの源泉となっている。

は、こうしたまちづくりを実践する際に採られた方法、つまりひとつのつながり方である。分野・組織を横断するフラット（水平・対等）なひとつのつながりを本研究では「動的ネットワーク」と名付けた。共通の目的や関心を求心力として、参加者の主体的なコミットメントによって形作られる。ひとつひとつのつながりを生み出すための共通の目的（共通善）となっているのがフェーズである。こうしたつながりは伝統的・一般的な地域組織（ヒエラルキー型のツリー構造）とは異なって機動力に富み、まちづくりの実践として何か新しいことを行う上で起動が早く、分散的・多発的にイノベーションが起こる点に特徴がある。

ただし、単に新しいことが起こるだけでは共通の目標や理念にもとづくまちづくりを行うことができない。由布院のまちづくりにおいては、「由布院らしさ」を基盤としたイノベーションが繰り返されており、その仕組みを説明するために組織的知識経営理論を援用した。この理論は暗黙知と形式知の相互変換と、個人と組織の間の知識循環によってイノベーションの展開を説明するが、その際に暗黙知の中に理念や共通善が含まれることによって、共通の課題解決に向けたイノベーションの発生を説明する。由布院温泉の場合には、動的ネットワークの求心力となっている共通善にまちづくりの理念が位置している。まちづくりの実践のはじめに丁寧な話し合いによって暗黙知の共有が行われ、それを具体的な形式知に変換し、それに多くの住民や関係者を巻き込むことによって、その理念を地域に広げ、由布院らしさに基づくイノベーションが発生している。こうした地域特性に基づくイノベーションの繰り返しによって市場適応を行ってきたことが、由布院温泉の市場競争力のもうひとつの源泉になっている。

に、とを組み合わせることで、本研究は最終的に観光まちづくりの「由布院モデル」を提示している。このモデルは、地域特性をつくることで地域全体をブランド化し、動的ネットワークを通じた知識循環によって地域特性に基づくイノベーションが連続的に発生することで、市場競争力を獲得するという21世紀的な地域振興手法を表現している。

このモデルの例示として、由布院温泉における旅館の在り方、由布院らしい食と地域の農業の関係、アートと景観形成という3つの領域を取り上げて考察を行った。また、由布院モデルの具体的な適用例として和歌山県田辺市における観光振興についても考察している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

米田誠司・大澤健〔2018〕「観光まちづくりにおけるイノベーションの源泉 由布院におけるアートをめぐる一考察」、『日本観光研究学会全国大会学術論文集』33、pp.117-120（査読無）

大澤健〔2018〕『観光まちづくり』の理論的課題、和歌山大学『経済理論』第392号 pp.81-107（査読無）

米田誠司・大澤健〔2017〕「観光まちづくりにおけるイノベーションの源泉 由布院料理研究会からの一考察」、『日本観光研究学会全国大会学術論文集』32、pp.101-104（査読無）

〔学会発表〕(計 2件)

米田誠司・大澤健：「観光まちづくりにおけるイノベーションの源泉 由布院におけるアートをめぐる一考察」、『第33回日本観光研究学会全国大会（2018年12月）

米田誠司・大澤健：「観光まちづくりにおけるイノベーションの源泉 由布院料理研究会からの一考察」、『第32回日本観光研究学会全国大会（2017年12月）

〔図書〕(計 1件)

・大澤健・米田誠司〔2018〕『由布院モデル 地域特性を活かしたイノベーションによる観光戦略』、学芸出版社、2018年12月、208頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：米田 誠司

ローマ字氏名：YONEDA SEIJI

所属研究機関名：愛媛大学

部局名：法文学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30636147

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。